愛を求める孤独な魂—ハイアシンス

中 井 誠 一

表面上一貫して見られる「階級闘争」というテーマや，その中で翻弄される主人公の生涯を鑑みる時，*The Princess Cassamassima* を一種の「政治小説」としてみることはできるであろう。ジェイムズはこの小説を *Atlantic Monthly* に掲載し始めた同じ年の1885年，すでに *Century Magazine* にアメリカの女性権拡張運動を取り扱った作品 *The Bostonians* を同時進行的に書き続けていて，これらは共にこの作家には珍しく当時の「革命」と「革新」を求める社会政治状況を描いたものとして注目された。しかしまた当時この 2 作品は共にそれぞれイギリスとアメリカで散々な不評を買った。その苦境の一端は，1888 年 1 月 2 日付の William Dean Howells 宛の手紙に伺える。

> I have entered upon evil days—but this is for your most private ear. It sounds portentous, but it only means that I am still staggering a good deal under the mysterious and (to me) inexplicable injury wrought—apparently—upon my situation by my two last novels, the *Bostonians* and the *Princess*, from which I expected so much and derived so little. They have reduced the desire, and the demand, for my productions to zero—as I judge from the fact that though I have for a good while past been writing a number of good short things, I remain irremediably unpublished. Editors keep them back, for months and years, as if they were ashamed of them, and I am condemned apparently to eternal silence. (James, *Letters* 208-9)

なぜこれ程までに不評であったかについては批評上様々な理由が論じられている。Yvor Winters が *In Defence of Reason* の中で述べているように，描写されている，暴力革命をとなえる地下組織の目的や活動，登場人物の性格などが余りに曖昧で具体性を持たず，読者に対してそれなりの恐怖感や説得力を与えないということがまず挙げられる。ジェイムズはニューヨーク版の序文で，自分の計画では「はっきりした具体的事例ではなくして，ぼんやりした外見，曖昧な動向や，響きや，徴候，かすかに感知できるものの存在，そして全般的にぼんやりした潜在的な可能性を提示することが必要であった」[1] と， 曖昧な描写はむしろ意図的であることを示しているが，Winters は，結局ジェイムズは革命家や地下組織などについて何も知らなかったのだと断じ，物語の大半で読者は「まるで淀んだ水の中にいるようだ」(Winters 334)とさえ述べている。しかし W. H. Tilley の詳細な調査が示すように，ジェイムズはこの革命家たちの世界を描くために実際かなりの資料を集めたり，ツルゲーネフを通じてバクーニンやクロポトキンなどの大物活動家たちに会ったり

もしていた。

序文の中で彼はまた，こうした批判を見越して次のように述べている。

> Let me at the same time not deny that, in answer to probable ironic reflexions on the full licence for sketchiness and vagueness and dimness taken indeed by my picture, I had to bethink myself in advance of a defence of my “artistic position.” Shouldn’t I find it in the happy contention that the value I wished most to render and the effect I wished most to produce were precisely those of our not knowing, of society’s not knowing, but only guessing and suspecting and trying to ignore, what”goes on” irreconsileably, subversively, beneath the vast smug surface? (*NYE* 5, xxii)

そして小説にとって「人生感覚と全てを見通す想像力」“the sense of life and the penetrating imagination” (5, xxii) が重要であることを訴えている。これはもちろん *The Art of Fiction* (1884) に典型的に示されている作家の想像力の優位の問題と直接つながる主張であるが，何よりもジェイムズが，いわゆる「政治小説」を描こうとしたわけではないということをここで十分考慮しておかなければならない。ある意味ではジェイムズにとって地下組織の実態やそれに係わる人々の性格付けは作品の構成上さして重要ではなかったとさえ言える。つまり，それが主人公ハイアシンス・ロビンソンにとって不気味で得体が知れないけれど，英雄的でロマンティックな想像力を刺激するものであればよかったのである。

しかしながら，*The Princess Cassamassima* がそれほどまで不評だった真の理由は，こうした小説技法に関わる様々な瞬昧な要素のためというより，むしろ皮肉なことに作品中の政治的な内容のためだと思われる。なにしろ登場人物たちのほとんどは下層階級の出身で，階級社会の転覆を熱望しているし，表題になっているカサマシマ公爵夫人は貴族社会を腐り切った退屈な世界と見なして地下運動に邁進する。中流階級も，労働者の視点から俗物たちの集団のように描かれているのである。当時のジェイムズの小説の読者層と見られる中流以上の人々からすれば, こうした内容が愉快なものでないことは明らかであろう。しかも登場人物たちが暴力革命を堂々と標榜しているのだからなおさら穏やかではない。

この作品が書かれた 19 世紀後半は様々な労働運動が国際的に広がり，階級闘争や革命といった考え方を余り受け入れなかったイギリスにもその余波がひたひたと打ち寄せてきていた時代であった。たとえば 1964 年に国際労働者協会（第一インターナショナル）の創立大会がロンドンで開かれ，その余勢を駆って，1867 年第 2 次選挙法改正が行われ，多数の都市労働者に選挙権が与えられた。ただ，第一インターナショナルがヨーロッパ大陸諸国で次第に先鋭化して革命的になるにつれ，イギリスの労働組合指導者は国際的な革

命団体と混同されることを恐れてそれから離れ, 72 年には本部がニューヨークへ移されている。また，マルキシズムの革命主義に対して，漸進主義，議会主義を主張して設立された「フェビアン協会」が社会主義労働運動に指導理念を与えたように，イギリスでは概して革命思想は強力な要因とはならなかったのだが, 1880 年代に起こったトラファルガー広場の暴動のような直接行動に接した時，社会上層部の警戒感は相当なものになったはずである。(大野，255-56) 当時の読者がどのような状況下でこの小説に触れ，どのような感慨を抱いたかは，以上のような歴史的事実からもある程度推しはかれるだろう。

しかし，前述したように，ジェイムズは確かに純粋な意味での「政治小説」を書くつもりはなかったのだが，彼がハイアシンスという主人公の性格付けの着想を得た時，この社会状況はどうしても外すことのできない環境的要件となっていた。ジェイムズはこの作品の着想の発端をロンドンの街を歩き回るところから直接始まったと述べている。

> There was a moment at any rate when they offered me no image more vivid that that of some individual sensitive nature or fine mind, some small obscure intelligent creature whos education should have been almost wholly derived from them, capable of profiting by all the civilization, all the accumulations to which they testify, yet condemned to see these things only from outside—in mere quickened consideration, mere wistfulness and envy and despair. (5, vi)

この obscure（身元の定かでない）という特質は，作品中で貴族と平民の間に生まれた私生児という形で具体化している。ジェイムズは，貴族の血を引き貴族的美的感覚を持ちながらその社会からは完全に疎外され黙殺され下層社会の無残な生活に甘んじなければならない人物，階級制度の矛盾を端的に集約した主人公を作り上げた。この矛盾をより深く追求するため階級闘争という当時の政治状況の枠組を使い，激しく気紛れだけれど美しく魅力的な公爵夫人を階級破壊の賛同者として配置することで，さらに複雑な葛藤状態を設定することになるのである。

主人公ハイアシンス・ロビンソンはある青年貴族とフランス人のお針子の間に生まれた私生児であり，母親は，動機は詳かにされていないが父親であるフレデリック卿を刺殺して捕まり数年後に獄死している。その後ハイアシンスは, 母のお針子時代の友人アマンダ・ピンセントに預けられる。幼い頃に，母の死の間際ニューゲート監獄へ連れていかれ，母と知らされないまま，ある女性と会った理由を，後年アマンダを問い詰めて初めて知ることになる。元々下層社会には珍しく繊細で思慮深い性質であったのが，出生の事情を知って以来ますます自らの血を意識することになる。彼は子供時代からよく『ファミリー・ヘラルド』や『ロンドン・ジャーナル』に描かれた貴族たちの物語を好んで読んでいたものだったが，自分の生い立ちを知るに至って，忌まわしい殺人犯の息子という負の意識とと

もに，いやそれを凌ぐように，貴族の息子という思いが内なる誇りとなっていったと見られる。

母親がフランス人で，自分の容姿にもそれが色濃く現れているからといって，かなりフランス語が使えるようになるという設定は多少強引だとしても，しばしば批判の対象となる, 下層階級出身にもかかわらず貴族的趣味を持ち優雅さを備えているという不自然さは, 彼の製本工という職業の設定によって幾分和らげられている。その職業がハイアシンスの審美的性質に相応しいという Oscar Cargill などの指摘 (Cargill 152) はあるが, むしろ本の装丁という芸術的な仕事や，時にはその中身に直接触れる経験を通じて自らの審美眼を肥やし，それが内なる誇りと絡み合って彼の優雅さを増していったと考えるほうがより的確な表現になるだろう。たとえば，公爵夫人は，会話の中で彼がショーペンハウエルに言及したことを，まるで奇跡であるかのように賛嘆する場面があるが，その職業から導き出しうるこうしたエピソードは，ハイアシンスの〈庶民らしくない特質〉を読者に納得させる効果を持っているといえる。

だからこそ，きらびやかな上流階級の世界から自分が徹底的に閉め出されているという思いはいや増しに増してくる。彼は想像の中で「豪華な部屋で，微笑を交わしながら穏やかな声で，偉い人達が誇り高いながらも優しい女性と芸術や文学や歴史を語る世界」(5, 140-41)を夢見るが，現実は「ロンドンという巨大な騒々しい無神経な世界が，彼には自分の貧乏や無気力を嘲笑っている一大生物のように思われ」(5, 169) るのであった。このような状況で彼は製本工の同僚であり，パリ・コミューンの亡命者であるユスタシュ・プパンや秘密組織の大物と見られるポール・ミュニメントらと知り合い，革命思想の洗礼を受けることになる。本来自分にも分け与えられてしかるべき華麗な世界から完全に疎外され，せっかくの審美的性質が下層階級のむさ苦しく卑俗な生活の中で空しく浪費される絶望感はハイアシンスを，酒場にたむろして口々に革命を唱えるえせ革命家たち以上に急進的にさせる。

しかし革命に対するハイアシンスの情熱はこうした個人的怨恨から発したものであったので，大衆に対する心からの同情や階級制度の不合理に対する憤りといったものが彼にはないといってよい。それは地下活動に係わっていく過程で，いわば大義名分として取り繕われたものに過ぎないと考えられる。彼は大衆についてこのように考えているのである。

> He was absorbed in the struggles and sufferings of the millions whose life flowed in the same current as his and who, though they constantly excited his disgust and made him shrink and turn away, had the power to chain his sympathy, to raise it to passion, to convince him for the time at least that real success in the world would be to do something with them and for them. (5, 163)

「少なくとも当座の間は」という表現が彼の大衆に対する態度の不安定さを示している。そしてこのような曖昧な姿勢は次の様な場面では鮮明に上流世界に傾斜したものとして現れるのである。

> He sometimes saw the name of his father's kin in the newspaper, but he then always cast the sheet away. He had nothing to ask of them and wished to prove to himself that he could ignore them (who had been willing to let him die like a rat) as completely as they ignored him. A thousand times yes, he was with the people and every possible vengeance of the people as against such shameless egoism as that; but all the same he was happy to feel he had blood in his veins that would account for the finest sensibilities. (5, l77)

最初ハイアシンスには秘密の会合場所だと思われた酒場サン・アンド・ムーンで労働者たちが口々に苦しい状況や革命の必要を訴えている間も,彼はそれらを「矛盾した空虚な,非実際的な話」(5, 355) としか感じず,「全員の念頭にちらついているのはパン屋の店先に乱入することだけだとはっきり気付いてた」と皮肉な目で観察している。彼がその中で次第に身につけてくる革命理論も，敬愛するポール・ミュニメントの姉ローズが，ある人の言葉と「ほとんど一語一句同じだ」(5, 145) と述べているように，図らずも付け焼き刃であることが見透かされている。

このようにハイアシンスの革命運動には，自分が本来属していたかも知れない貴族階級から疎外されているという意識が通底している。カサマシマ公爵夫人との交流やヨーロッパ旅行の後，ハイアシンスが今度は反動化して，伝統的な美の世界に傾斜していくのは当然のことであり，彼の審美的性格に合致する結果といえよう。それでは，大衆に対して冷ややかな眼を向けている一方で，彼が自らを犠牲にし某公爵を射殺するという使命まで引き受けてしまうのはなぜか。

その最大の理由はポール・ミュニメントに対する個人崇拝である。ハイアシンスはポールに会った当初からこの若い薬屋の革命家らしい堂々とした態度や冷静な口振りに魅了される。サン・アンド・ムーンでホッフェンダールという秘密組織の大立物がロンドンに来ていることを知らされたハイアシンスは，ポールが自分をもっと信頼してくれて，最初に教えてくれればいいのにと思う。そして「一身を捧げて秘密を守るべきことがあるとすれば，いかに立派に信頼に答えられるかを示す機会を特に自分に与えてもらいたかった」(5, 357) と望む。彼は次のような空想さえするのである。

> If he had a definite wish while he stood there it was that that exalted deluded company should pour itself forth with Muniment at its head and surge through

the sleeping world and gather the myriad miserable out of their slums and burrows, should roll into the selfish squares and lift a tremendous hungry voice and awaken the gorged indifferent to a terror that would bring them down. (5, 358)

この直後ハイアシンスは椅子の上に飛び乗って，何かの役に立てるなら自分はどんな危険なことでもやる，と実際に皆の前で演説をぶつ。しかしその言葉がただポールに向けられていることは鋭敏な読者には明らかであろう。ハイアシンスの政治的情熱を怪しんでいたポールはこの行為に驚き，彼をホッフェツダールに会わせて有頂天にさせる。ハイアシンスが暗殺の使命を受けるのはこの興奮状態の中でであるということは注目しておかねばならない。冷徹なポールは後に公爵夫人に「彼は考えなど持ったことはありませんよ」(6, 230) と述べるように，ハイアシンスという男は誠実ではあるが思想などもたず，何らかの恨みを貴族に抱いており，かつ自分を崇拝していることを鋭く察している。このような性格はまさにテロリストの要件といえる。この時ポールはまさにハイアシンスという忠実なテロリストの卵を捜しだしたのである。

ポール・ミュニメントがハイアシンスに示す冷静な態度に比べて，ハイアシンスが彼に向ける敬愛は熱く，同性愛に近いものすら伺える。同時進行的に連載していた *The Bostonians* の中で，ジェイムズは二人の女性主人公の間の同性愛を匂わせる描き方を見せているが，この作品では今度は男性間の同性愛を仄めかしているように思われる。たとえば，フランスとイタリアの旅行から帰ってきたハイアシンスが，ポールと二人でグリニッチを散歩する様子はまるで恋人同志のように描かれている。

Paul changed his posture, raising himself, and in a moment was seated Turkish-fashion beside his friend. He put his arm over his shoulder and drew him, studying his face; and then in the kindest manner in the world he brought out: “There are three or four definite chances in you favour.”

“I don’t want second-rate comfort, you know,” said Hyacinth with his eyes on the distant atomospheric mixture that represented London.

“What the devil *do* you want?” Paul asked, still holding him and with perfect good humour.

“Well, to get inside of *you* a little; to know how a chap feels when he’s going to part with his paticuluar pal.”

“To part with him?” this character repeated.

“I mean putting it at the worst.”

“I should think you’d know by yourself—if you’re going to part with *me*.”

At this Hyacinth prostrated himself, tumbled over to the grass on his face, which he buried in his hands. (6, 214)

ハイアシンスは密かに熱烈にポールを崇拝し，彼の特別な友情の証を求めている。しかしそれは当然ながら決して与えられることはない。ハイアシンスは彼にとっては革命成就のための一つの駒に過ぎないからだ。この散歩の終わりに語り手が述べるように「その感情はもっぱら自分の側だけのもの」(6, 219) なのである。公爵夫人とポール・ミニュメントの親交が深まり，二人が夜中に行動を共にし，それをハイアシンスが目撃した時の衝撃は，実は夫人とポールの二人に対する二重に交差した複雑な心理によるものだったと考えられる。そしてポールに対するこうした熱い敬慕は，暗殺計画を実行する最終段階で彼がハイアシンスへの不信感を抱いているらしいことをシンケルから聞かされた時に破綻してしまう。

ここで，これに関連してハイアシンスという登場人物に見られる重要な特質を指摘しておかなければならない。それは「愛の欠如」である。彼には愛し愛される対象がほとんどいない。先に述べた経緯のため，彼は母と父を共に失っており天涯孤独の身である。人の母親の自慢話を聞いた時など，“the chord of melancholy aimless wonder as to the difference it would have made for his lif to have had some rich warm presence like that in it”「豊で暖かな母の存在があったら，人生も違っていただろういう物悲しくあてどのない不思議な調べ」(5,144) を感じる 。育ての親であるアマンダはたしかに彼を愛してはいるが，余りに因習に懲り固まった存在で，とても母親代わりになるような人物ではない。アマンダに対して本当に愛情が湧くのは彼女が死の病の床に就いた時であった。幼馴染みの美しいミリセント・ヘニングに対する愛情も当初はさほど特別なものではなかった。久しぶりに彼女と再会し，その後付き合いを始めた時にも，彼はミリセントに対してこのように思う。

There were things in his heart and a torment and a hidden passion in his life which he should be glad enough to lay open to some woman. He believed that perhaps this would be the cure ultimately; that in return for something he might drop, syllable by syllable, into some listening ear that would be attached to some kissable cheek, certain other words would be spoken to him which would make his pain for ever less sharp. But what woman could he trust, what ear would be both safe and happily enough attached? How much didn’t he already ask? The answer was not in this loud fresh laughing creature, whose sympathy couldn’t have the fineness he was looking for, since her curiosity was vulgar. (5, 87)

そしてついに，自分の衷心の思いを「ぶちまけ」たくなるような女性，カサマシマ公爵夫人が彼の前に現れることになるが，詳述するまでもなく，全くの身分違い，憧れの的でこそあれ恋愛の対象にはなり得ないことを痛烈に思い知らされることになる。ロンドン郊外にある彼女の別荘メドレーで過ごした夢のような日々はその可能性の扉を少しは覗いてみることを許されただろうが，所詮彼女の興味は，彼が革命思想の秘密組織に係わり，下層階級出身でありながら貴族的趣味を持つ風変わりな人物であるという点にしかなかった。そんな公爵夫人について，いつも彼女につきまとっている放蕩貴族のショルトーは，彼女には「まともな人間的感情」“decent human feeling” (265) がないと断じ，それは「彼女のハイアシンスに対する扱い」“Her treating you” (267) からも分かると述べている。つまり公爵夫人はハイアシンスを一人の人間として，あるいは一人の男として扱っているのではないということを仄めかしているのである。事実ハイアシンスが美の世界に傾斜し，革命運動にも真摯でないことが分かった途端，そして自分の階級の側にすり寄って来た途端に彼から離れてしまう。このようにハイアシンスは愛の対象―それが母性愛であれ恋愛であれ同性への敬慕であれ―を求めながらも，ついに得ることができない。すべての愛に挫折するのである。

物語の最後でハイアシンスが某公爵を暗殺するのをやめ，ピストル自殺を遂げる理由については様々な解釈がされている。Cargill はこの作品にハムレット的な運命と自由意思の要素を見いだし，ハイアシンスの自殺を彼の最終的自由意志の表明と捉えている。(Cargill, 160-64) また, Lionel Trilling は, 彼の子供的な要素を認めながらもその死を「人間的英雄」の死と見做している。(Trilling, 125) しかし，私には，ハイアシンスの死は何よりも「愛の挫折」によるものだと思われる。特に，誰もが当然のごとく第一にあげるカサマシマ公爵夫人との愛ではなく，むしろ最後の拠り所としてのミリセント・ヘニングへの愛の挫折なのである。

Cargill が,「ミリセント・ヘニングは一般的人気を博している」(Cargill 153) と述べたように，彼女は，当時の活気あふれる上昇志向のロンドン娘として活き活きと描き出された魅力あふれる人物である。彼女は小説の冒頭部ですでにハイアシンスに抱きついてはキスをする 8 歳の女の子として描かれている。その後家族が離散してからは，その経緯は全く不明だが，美しい服屋の店員として再びハイアシンスの前に現れる。そしてこの物語全体を通じて表に出たり裏に引っ込んだりしながらも常にハイアシンスと係わりをもち続けているのである。確かにハイアシンスは先ほどの引用にも示されているように，彼女を美しく魅力的だとは思っていても，当初は本当の愛の対象とは見ていなかった。しかしミリセントの存在が彼の心の奥底に意外に固着していたことは，ショルトーとの逢い引きを図っていたところに出くわした時の激しい嫉妬や，様々な機会に洩らす彼女への想いからも明らかであろう。たとえばハイアシンスはメドレーで公爵夫人と過ごした夢のような 3 週間の間ですらミリセントに手紙を書いているし，パリにいる時にも彼を励ましてくれる感

動的な言葉を思い浮かべている。

こうした意識下に潜んだ想いが素直に表面に現れるのは，公爵夫人がポールと夜中に行動を共にしているのを目撃し，絶望感を募らせる以後のことである。ある時ハイアシンスはミリセントに付き添って日曜日の礼拝をすることになるのだが，他愛もない会話を交わしながらもそれまで気がつかなかったミリセントの魅力に惹かれていく。

> Hyacinth had never felt himself under such distinguished protection; the Princess Casamassima came back to him in comparison as a loose Bohemian, a shabby adentureress. He had sought her out to-day not for the sake of her austerity—he had had too gloomy a week for that—but for that of her genial side; yet now that she treated him to the severer spectacle it struck him for the moment as really grand sport, a kind of magnification of he rich vaitality. (6, 329)

その後ハイド・パークを散歩しながら語り合うのだが，彼は思わず「君は可愛い人だよ」“you're a sweet old boy” (6, 335) と洩らし，ミリセントも「どうしてもっと前に言ってくれなかったの」と応じる。互いの素直な表現が二人の関係をますます親愛なものにしていくのが感得されるのである。そしてそれは次第に大きなうねりとなって表層化する。

> But when the faculty of affection that was in her rose to the surface it diffused a glow of rest, almost of preotection, deepening at any rate the luxury of their small cheap pastoral, the interlude in the grind of the week's work; so that though neither of them had dined he would have been delighted to sit with her there the whole afternoon. (6, 340)

この引用で示されている「彼女の内奥に潜む愛の力」という表現は二人の新たな関係を予感させるものとして重要である。

結局ハイアシンスにとって，カサマシマ公爵夫人は所詮公爵夫人でしかなく，階級制度の中でその身分差は巨壁のように屹立していた。彼はついにその壁を乗り越えることはできなかったし，それは最初からほとんど予想されていたことでもあった。公爵夫人への叶わぬ思慕の結末は確かにハイアシンスに甚大な挫折感を与えている。しかしここで重要なのは，たとえ自分が置かれている窮状からの逃避であったとしても，この時彼が「逞しく，あけすけで，素朴な性格で，寛大であり，文明の毒に侵されていない」(6, 420)女性，ミリセントを必要としていることを明確に認識することである。

> [H]e asked himself if at bottom he hadn't liked her [Millicent] better almost than

any one. He tried to think he had, he wanted to think he had, and he seemed to see the look her eyes would have if he should swear to her he had. (6, 421)

ハイアシンスはある意味でミリセントに，いつでも舞い戻ることができる〈理念上の母〉の役割を見ようとしていたのかも知れない。しかし残念ながら現実のミリセントは，彼の想定以上に逞しく強かな上昇志向のロンドン娘であった。カサマシマ公爵夫人に暗黙の別れを告げた後，ミリセントと会うために彼女の店に立ち寄ったハイアシンスは，そこで新しいドレスを身にまとった美しい姿態をショルトーに眺め回されている彼女を見いだすことになる。彼に気づいたショルトーは意味ありげに見つめ返し，ハイアシンスは何も言わずに店を後にする。ハイアシンスがこの直後に自殺したことは不思議なことにあまり重く取り上げられることはない。James 特有の〈登場人物退場〉の語りのために，それらの直接的な繋がりに対する，読者の側の認識が阻害されてしまうことも一因であろう。[2] しかしこうした観点から見直せば，彼の自殺の「直接の動機」はむしろこの出来事だったと解釈することが可能であろう。いまや彼にとっては意味も目的も曖昧になってしまった公爵暗殺の指令の重圧，カサマシマ公爵夫人に見放された絶望感，そしてポール・ミニュメントからも信頼を受けていないという認識，こうした窮境からの救いを，ハイアシンスはミリセントに求めていたのである。今や彼は最後に還っていく場所を，自分に残されていると思いこんでいた拠り所を，そして唯一の活き活きとした愛の対象を失ってしまったのである。

注

1　*The Princess Casamassima* からの引用はすべて *The New York Edition*, 5-6 vols により，以後かっこ内に，Preface はローマ数字で，本文はアラビア数字で，前に巻数，後にページ数を記す。

2　James はしばしば，場面転換の際にそれまでの登場人物を〈退場〉させ，それ以降登場させず，語り手や他の登場人物にその人物のことを〈語らせる〉という手法をとる。ここでは，ミリセントとショルトーとの親密な様子を目撃した後，ハイアシンスを一切登場させず，自殺の場面すら描かないことを指す。中井誠一「Henry James の作品における〈退場〉する女性と読者の評価―“The Liar”を中心として―」(『甲南英文学』第 19 号，2004 年)参照。

参考文献

Anderson, Charles R. *Person, Place and Thing in Henry James's Novels.* Durham: Duke University Press, 1977.

Auchincloss, Louis. *Reading Henry James.* University of Minnesota Press, 1975.

Banta, Martha. "Beyond Post-Modernism: The Sense of History in *The Princess Casamassima*. *The Henry James Review* 3 (1982): 96-107.

Cargill, Oscar. *The Novels of Henry James*. New York: The Macmillan Company, 1961.

Chapman, Mark. "Physical Mobility as Social Power in *The Princess Casamassima*." *The Henry James Review* 9 (1988): 165-175.

Fischer, Mike. "The Jamesian Revolution in *The Princess Casamassima*: A Lesson in Bookbinding." *The Henry James Review* 9 (1988): 87-104.

Hoffman, Frederick J. 1964. *Henry James's Major Novels: Essay in Criticism.* Ed. Lyall H. Powers. Michigan State University Press, 1973. 133-145.

Jacobson, Marcia. *Henry James and the Mass Market*. University of Alabama Press, 1983.

James, Henry. *Henry James Letters Vol. III 1883-1895*. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1987.

---. *Vol. VI of The Novels and Tales of Henry James*. Charles Scribner's Sons, 1980. Fairfield, New Jersey: Augustus M. Kelly Publishers, 1976.

Seltzer, Mark. "The Princess Casamassima: Realisation and the Fantasy of Surveillance." 1984. *Henry James: Critical Assessments* Vol. IV. Ed. Graham Clarke. Helm Information Ltd., 1991. 529-551.

Sicker, Philip. *Love and the Quest for Identity in the Fiction of Henry James*. Princeton University Press, 1980.

Sypher, Eileen. "Anarchism and Gender: James's *The Princess Casamassima* and Conrad's *The Sacret Agent*." *The Henry James Review* 9 (1988): 1-16.

Tilley, W. H. *The Background of The Princess Casamassima*. University of Florida Monographs, HUMANITIES, No.5. University of Florida Press, 1960.

Trilling, Lionel. "The Princess Casamassima." 1948. *Henry James's Major Novels: Essay in Criticism.* Ed. Lyall H. Powers. Michigan State University Press, 1973. 103-132.

Wagenknecht, Edward. *The Novels of Henry James*. Frederick Ungar Publishing Co., 1983.

Winters, Yvor. *In Defence of Reason*. Routledge & Kegan Paul, 1960.

秋山正幸『ヘンリー・ジェイムズ作品研究』南雲堂，1981.

大西昭男『見ようとする意志―ヘンリー・ジェイムズ論―』関西大学出版部，1994.

大野真弓編『世界各国史 1 イギリス史』山川出版社，1975.

高橋正雄編『ヘンリー・ジェイムズ研究』北星堂，1980.